



2015年9月15日
速報

メディアお問い合わせ

Valerie Tate
Getty Communications
(310) 440-6871
vtate@getty.edu

J・ポール・ゲティ美術館主催若い世代:現代日本の写真



(Left) *Mother's Gentle Hands*, 2009. Shiga Lieko, Japanese, born 1980. From the series *Rasen Kaigan (Spiral Shore)*. Chromogenic print. 35 7/16 x 23 5/8 in. The J. Paul Getty Museum, Los Angeles, Purchased with funds provided by the Photographs Council © Shiga Lieko 2015.1.6. (Center) *Portrait of Second-hand Clothes No. 52*, 1997. Onodera Yuki, Japanese, born 1962. Gelatin silver print. 16 1/2 x 16 1/4 in. Courtesy of the artist and Yossi Milo Gallery, New York © Onodera Yuki, Courtesy Yossi Milo Gallery, New York. L.2015.17.6. (Right) *1980 and 2009, Nagayama, Japan*, 2009. Otsuka Chino, Japanese, born 1972. From the series *Imagine Finding Me* Chromogenic print. 5 1/2 x 3 3/4 in. Wilson Centre for Photography © Otsuka Chino L.2015.16.8

ロサンゼルス-長く男性による支配が続いてきた、日本の写真の歴史。しかし、21世紀に入り、劇的な変化が生じています。このところ、女性を写真の被写体という立場に閉じ込めてきた伝統に反旗を翻し、若い女性の写真家たちが幾人か、自らを被写体としながら名声を得ています。彼女たちの生み出す作品は、私的で内密な情景と刺激的なセルフポートレートで、日本のアートシーンのありさまを変革しました。2015年10月6日から2016年2月21日までゲティ・センターで開催される、**若い世代:現代日本の写真展**では、日本生まれの現代の写真家たちの中から、1990年代から2000年代にかけて台頭した写真家、**川内倫子、オノデラユキ、おおつかちの、澤田知子、志賀理江子**の作品を紹介します。

「彼女たちは、さまざまなアプローチで現代の日本における生を探索しており、その深い文化的伝統をどう捉え、どう対応するかを示しています。」J・ポール・ゲティ美術館のティモシー・ポッツ館長は、述べています。「静かな朝の儀式から、お見合いと結婚のシーンまで、今回の作品群からは、日本文化の独自性と世界の中でのその位置付けについて、意味深い視点から経時的に観察することができます。」

こうした若い世代の写真家たちが台頭してきたのは、20世紀終りのことで、彼女らはまとめて扱われることが多く、彼女らの作品も「女の子写真」というレッテルを貼られました。実際には、彼女らの作品は審美的にも、関心の対象から見ても、多様なものにもかかわらずです。この「女の子写真」という言葉は、写真評論家の飯沢耕太郎による造語ですが、大部分の人から冷笑的なものを受け止められました。しかし、こうした女性たちがすぐれた作品を創りあげたことの証だと理解する人もいました。ある世代の写真家たちを「女の子写真」という言葉でくっ

てしまう傾向に対抗して、若い世代では、写真家として活躍中の 5 名の、ここ 20 年間の幅広い作品を紹介しています。展示会では、この 5 名の各写真家の 1 つのシリーズから選び抜いた作品を紹介します。その中には、当美術館が最近取得した澤田知子と志賀理江子の作品も含まれます。この作品取得は、ゲティ美術館写真評議会の支援のおかげで、可能になりました。

写真家たちの紹介

2001 年、川内倫子は、しばしば見逃されがちな、日常の瞬間をその独自のスナップショット的スタイルで捉える作品で日本の写真界に躍り出ました。作品では、カラーフィルムを用い、6x6cm のローライフレックスカメラをよく使用します。川内は、自分の身近な世界にある、静寂で断片的なシーンを捉え、夢の中で静止しているかのような印象を生み出しています。川内の作品プロジェクトの 1 つに、*Cui Cui* というものがあります。このタイトルは、鳥のさえずりを表すフランス語の擬音語です。このプロジェクトで彼女は、自分の家族と故郷に関わる時の経過にフォーカスしています。食事とそのお祈りなど、日常の儀礼やありふれた物体を捉えた写真もあります。また他に、川内自身の人生の転機となった重要な出来事を記録したものもあります。



Untitled, 2005. From the series *Cui Cui*. Kawauchi Rinko, Japanese, born 1972. Chromogenic print. 9 5/8 x 9 5/8 in. Courtesy of and © Kawauchi Rinko. EX.2015.8.1

東京に生まれ、現在はフランスを拠点としているオノデラユキは、ファッション業界に幻滅した後、写真の道に入りました。日本語の「写真」という言葉は、「現実を写す」という意味になります。

しかし、オノデラは、写真が世界を正確に再現するという見方を覆すことに関心を抱いており、写真を使って現実を無視した超現実の画像を生み出します。今回の展示会で展示するのは、オノデラの古着のポートレートシリーズの作品で、アーティストのクリスチャン・ボルタンスキーによる *Dispersion* (分散) というインスタレーションの衣類を、転用した写真です。このインスタレーションは、会場に大量の衣類を配置して、来場者にそれを持って帰ってもらい、「分散」してもらうというものでした。オノデラはその古着を 1 着ずつ、モンマルトルにある自分のアパートの窓を開けて吊るし、撮影しました。フラッシュを使うことで、衣類の幽霊のような効果が強化されています。

おおつかちは、10 歳の時に日本を離れ、英国に留学しています。そのため、生涯のかなりの部分で 2 つの文化の間で板挟みになっており、その写真プロジェクトの多くは、日本人と英国人という 2 つのアイデンティティの交錯に基づいています。若い世代では、おおつかの写真シリーズ、*想像して私を探して* (Imagine Finding Me) の「ダブルセルフポートレート」の中から選んだ作品を紹介します。これは、昔の自分と話してみたいという、おおつかの好奇心から生じたものです。デジタルレタッチャーを利用し、おおつかは、現時点の自分のセルフポートレートを、自分の家族のアルバムにある昔の自分が写っている古い写真にシームレスに組み合わせています。それにより、彼女の人生の中の違う時代、違う瞬間の姿が組み合わせられるのです。こうした意味で、写真が過去への入り口となり、一種のタイムマシーンとなって、おおつかは自分の記憶を旅する旅人となるのです。

日本の神戸に生まれ育った澤田知子は、セルフポートレートによってアイデンティティを探っています。彼女の姿を劇的に変える、コスチューム、かつら、小道具、化粧、体重の増量などの手段で、澤田はさまざまなキャラクターに変身します。彼女の作品はそうしたパフォーマンスとポートレートとが交錯したもので、文化的伝統やステレオタイプを取り上げ、個性と自己表現のありさまを示しています。澤田のプロジェクト、*OMIA* は、J・ポール・ゲティ美術館が最近取得したもので、セルフポートレート 30 点を含むものです。いずれも同じ写真店で撮影していますが、さまざまな女性のあり方を表すことを目的としています。これらの写真は、「お見合い」で伝統的に撮影されるお見合い写真を模したものになっています。お見合いとは、日本の習慣で、決められた相手との結婚に

おいて行われる、正式な出会いの場です。OMIA♡の写真群は独自のもので、澤田自らが選んだ古い写真用額縁も含まれます。これは、日本各地の写真店の店頭によく飾られていたポートレートを再現するためです。

「澤田の可愛くて、楽しそうなセルフポートレートは、日本文化に関する基本的な解説と矛盾しています。」J・ポール・ゲティ美術館の写真部門のキュレーター助手であり、本展示会のキュレーターでもあるアマダ・マドックスは述べています。「OMIA♡で澤田は、こうした伝統が今でも日本社会で重要な役割を果たしていることを、思い出させてくれるのです。」

創作に当たるとき、志賀理江子は、地域社会と協力して、その中に同化し、その歴史や神話を自分の作品に取り入れていきます。2008年、志賀は日本の北部にある東北地方に移住しました。そこは大半が農村部で、日本の民間伝承とのかかわりの強い地域です。その東北にある北釜地区の小さなスタジオを拠点にして、志賀はその町の公式写真家として、地元のイベント、お祭り、住民を記録しています。2011年の東北の大震災と津波で、北釜の大部分が荒廃してしまいましたが、それでも志賀は写真を撮り続け、自然災害がこの地域と人々に及ぼした影響を記録しました。2008年から2012年にかけて撮影された螺旋海岸というシリーズでは、この北釜という独特の土地の混沌と神秘を表しています。神話、自然災害、トラウマに関連付けられた歴史により、北釜は、どこかこの世ならざる、世界の終わりの後の場所のようです。東北の大震災後に撮影された作品を含む、螺旋海岸からの作品6点が展示されます。この災害の際には、志賀は自宅から避難することを余儀なくされました。



OMIA♡, 2001. Sawada Tomoko, Japanese, born 1977. Chromogenic print. 27 7/8 x 22 1/16 in. The J. Paul Getty Museum, Los Angeles, Purchased with funds provided by the Photographs Council © Sawada Tomoko. 2015.2.28

若い世代: 現代日本の写真展は、2015年10月6日から2016年2月21日まで、ゲティ・センターのJ・ポール・ゲティ美術館で開催されます。本展のキュレーターのアマダ・マドックスは、同美術館写真部門のキュレーター助手を務めています。ゲティの写真センターでは、石内都: *Postwar Shadows* 展を同時開催します。

関連イベントとして、澤田知子と志賀理江子によるギャラリー内での「ポイント・オブ・ビュー」トークを、10月8日(木)午後1:30から開催します。さらに、現代日本の写真:「女の子写真」への反動と題されたパネルディスカッションを、ゲティ・センターにて10月15日(木)午後7時から開催します。ここでも、澤田と志賀が参加し、モデレーターを東京写真美術館の主任キュレーターである笠原美智子が務めます。

###

J・ポール・ゲティ財団は、美術に貢献する国際的な文化・慈善組織で、傘下にJ・ポール・ゲティ美術館、ゲティ・リサーチ・インスティテュート、ゲティ・コンサベーション・インスティテュート、ゲティ基金があります。J・ポール・ゲティ財団とゲティ・プログラムはロサンゼルスとパシフィック・パリスーズのゲティ・ヴィラの2ヶ所で幅広い観客を集めています。

J・ポール・ゲティ美術館は、ギリシャ・ローマの古美術品、1900年までのヨーロッパの絵画、ドローイング、手書き文書、彫刻、装飾品に加え、現在までの世界各地の写真を所蔵しています。美術館の任務は、所蔵品を展示、解説し、重要な貸出展示や出版で、地元または世界各地から訪れる観客に教育を提供し、楽しんでもらうことにあります。これは、進行中の調査プログラム、補修、美術作品への知識と関わりを深くするための公共プログラムに支えられています。

ゲティ・センターのご案内

ゲティ・センターは火曜日から金曜日および日曜日の午前 10 時から午後 5 時 30 分、土曜日の午前 10 時から午後 9 時に オープンしています。また、金曜日の特別延長開館時間は午後 9 時までです。5 月 30 日～8 月 29 日 月曜日と主な祝祭日は休館です(7 月 4 日は開館)。ゲティ・センターへの入場は無料です。駐車料金は 1 台につき 15 ドル。土曜日の午後 5 時過ぎ、週を通じて夜のイベントには 10 ドルとなります。駐車場や入場には予約は必要ありません。イベントの座席および 15 名様以上の団体には予約が必要です。ご予約および詳細は(310)440-7300 までお電話ください(英語またはスペイン語)。耳の不自由な方のための TTY ラインは(310) 440-7305 です。ゲティ・センターの所在地:1200 Getty Center Drive, Los Angeles, California

詳細は www.getty.edu でご覧いただけます。

www.getty.edu/subscribe で e-Getty に登録すると、ゲティ・センターおよびゲティ・ヴィラのイベントのハイライトが 毎月無料で電子メールにより送信されます。公共プログラムの全日程は www.getty.edu でご覧ください。